

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第27号 - 通巻第39号)

発行：2022年12月21日

山口重克追悼特集号1

パート2 山口理論の地平(1)

福田 豊

(電気通信大学名誉教授 fukuda@uec.ac.jp)

近代化とコミュニティ

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-27-5

[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_26](http://www.unotheory.org/news_II_26)

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上1-26-1 武蔵大学 横川信治

E-mail: [contact@unotheory.org](mailto:contact@unotheory.org)

ホームページ <http://www.unotheory.org>

---

# 近代化とコミュニティに関する一試論

福田豊（電気通信大学[名誉]） [fukuda@uec.ac.jp](mailto:fukuda@uec.ac.jp)

【要約】山口先生は近代化を人間本来の多様性を減衰ないし排除するものとして批判されていた。近代化、合理化、共同体(コミュニティ)等について改めて考察する必要性を示されていたのである。この小論ではそれらについての試論を展開している。そのポイントを示すと以下ようになる。単なる産業化としての近代化ばかりでなくいわゆる生活世界の近代化があり、それが再帰的近代化の基盤となる。合理化は社会的世界においては「認知的・道具的合理性」と「道徳的・実践的合理性」を結果し、それによって不可避免的に発生する競合に対応する必要がある。共同体(コミュニティ)については、規範論的なイメージで固定化することなく、本来的な共同性(世界内存在、被投企等)を歴史的な文脈の中で捉える必要がある。そして新たな時代の基盤となるコミュニティにおいては、その秩序はいわゆる「ディスクール」によって現実化されなければならない。

## 1 山口先生による問題提起とわれわれの課題

山口先生は、生前 Facebook のグループ「Shige の部屋」で、多様性と合理化、コミュニティなどの関係についてコンパクトにそしてクリアに自説を展開されていた。残念ながら facebook では先生の投稿はもうみられなくなっている。偶然にも、ダウンロードしておいた部分（Shige の呟き[6]）があり、共有されるべき論考と思われるので、長文になるがここに紹介する（ただし紙幅の都合から、一部を省略。また原文では発表メディアの特性もあって段落設定はなかったけれど、読みやすさを考慮し筆者の判断で最低限の段落設定をした）。

### 1-1 山口先生の論考

Shige の呟き（6）： 現代社会の特色に就いて語ろうとする場合のキーワードの一つは多様性ではないかと思う。多様性というのは静態的な概念であるが、動態的な側面から、つまり歴史の発展ないし変容、進化といった観点から捉えれば多様化ということになる。多様性の反意語は一様性であるが、これは同質性、均質性、画一性、などと捉えることも出来るとすれば、これらを変化の観点から捉え直すならば、一様化ないし同質化、あるいは均質化、均等化、画一化ということになる。平等ないし平等化というもの、同じ仲間の概念とっていいかも知れない。

現代社会ではいろいろな分野で多様性ないし多様化が話題に上っているが、経済の分野では、19世紀のはじめ頃まで西ヨーロッパを中心に同質化ないし一様化が進行し、19世紀末頃からそれが逆転し、異質化ないし多様化が進行したとっていいだろう。

（中略）

以上は、経済一般ないし資本主義市場経済の静態ないし動態に関する事実とそれについての論説を、一様性ないし一様化と多様性ないし多様化という観点から整理して紹介したものである。これを要するに、私が多様性ないし多様化と呼んだものは、一様性ないし一様化の反対物あるいは障害の存在ないしその増大のことであると言い換えることが出来る。

ところで、これまでのところ私はこの一様化の障害についての価値判断をしないうで、その存在なり増大についていわば客観的に論述してきた。おそらく近代化を肯定的に評価する近代主義者は、近代化の障害となる共同体規制、伝統的な人間関係、家族関係、それに伴う行動様式、価値観などの諸要因が市場経済の進展とともに排除されて消滅して行くのを歴史の進歩とみる歴史観を持っているのであらうと思われるが、それにたいする私の価値観を言うならば、私はこのような近代主義、あるいは一種の啓蒙思想には抵抗がある。一様性と画一性に普遍的価値があるという価値観に親近感を持ってない。私がマイクロ理論やマクロ理論などの近代経済理論や計量経済学にあまりなじめないうできたのは、これらの理論が人間の多様性を考慮外において、人間を画一的に、金太郎飴のように扱っているせいかもしれない。これは好き嫌いの問題であるから、特に合理的な根拠はないといふべきかもしれないが、あえて言えば、一様性ないし画一化という事態は、利潤の極大化とそのため効率化を最高の価値の一つとみる資本主義市場経済が特殊歴史的に作り出した事態であり、したがってそれに伴う価値観も人類一般に普遍的な価値についての見解とは言えないといふてよいのではないか。だから、私になじめないうには原始的な本能ないし遺伝子に由来する原因もあるのではないだらうかといふ気がしている。

そもそも、人間生存の基盤である地球の自然環境（空気、土地、河川、海洋、太陽、気候、動植物、鉱物資源、等々）の存在態様は多様であり、人間そのものも本来、人種、言語、年齢、身長、体重、健康、性格、能力、欲望、嗜好、文化・習俗、価値観、等々が多様である。これらの多様性がすべて、有史以来不変であつたかといふと勿論そうではない。自然的条件の変化によりこれらの多様性が増減したこともあらうが、社会的条件の変化により増減したこともあらう。

しかし、ほぼ知り得る史実から推測しうることは、とりわけ資本主義市場経済の発展に伴って、一部の多様性、たとえば欲望や年齢、能力などの多様化は増大したが、他方で、文化・習俗や価値観などの多様性は減少し、一様化が進んだとみてよいだらう。しかも、この増減は必ずしも円滑に進行したわけではなく、それらの進行に賛同できない人々の様々な抵抗があつた結果であつたらう。もちろんこれらの多様性の中には、例えば所得や身分の格差などのように減少することが望ましいと思われるものが少なからずあることには必ずしも異論はない。

しかし、いわゆる近代化を普遍的な価値とみる近代主義的な観点からすると、反近代的あるいは非効率的なものとして廃棄・排除されるべきと思われている文化・習俗、伝統、例えば義理・人情、連携、絆、無尽などの相互扶助、共同体規制、集団主義、等々の中には維持、存続されるべき多様性も多々あるように思われる。といふよりもこちらの方が人間本来の性向に基づくものであり、人類史的に見れば、近代欧米的な、より厳密にいえば、キリスト教的、覇権主義的な一様化を目指す攻撃的な価値観ないし行動様式の方が、歴史的に一時的、経過的な存在であり、人間本来の多様性志向によって押し戻され、人類史から押し出されていく存在ではないかと思われる。もちろんこれは、私の価値観からの希望的予想であるが、現今のいわゆる保護主義的な動向に対する批判的な論評には、このような理由から私にはやや違和感がある。

市場経済の旧体制浸食・破壊の力に侮りがたい力があることは確かである。しかし、それに対する旧体制側の防衛・反抗の力も捨てたものではない。例えばイスラム社会は、欧

米近代社会からの長年にわたる武力による圧力を含む数々の近代化圧力にもかかわらず、市場経済の浸食によって必ずしも経済体制も習俗も解体されていない。近代主義者から見るとこの蒙昧さが我慢ならないところかもしれないが、私はむしろ人間のこの頑固な原始性に大きな期待を持っているのである。

## 1-2 われわれの課題

先生の主な主張を縮約すれば、「近代化は一部の多様性を増大させたものの、基本的には一様化を推し進め、人間本来の多様性を減衰ない排除する傾向をもつ」と言って良いだろう。先生の指摘により、われわれは改めて、多様性のあり方や、その基盤としてのコミュニティ（共同体）、近代化、その理念としての合理性（化）について、正面から向き合う必要性を感じるのである。

われわれの課題は主に次の3つであろう。①画一性（一様化）と多様性（多様化）について ②近代化とはどのようなことなのか ③伝統的社会としてのコミュニティは回復されるべきものなのか？

以降、これも紙幅の制約もあり①は割愛し、主に②と③について考察する。なお、多様性に関して、一点だけ触れておく。いわずもがなのことであろうが、われわれは「人間本来の多様性」は神話的ないし宗教的世界観を宿すものであるという前提はおかない。

例えば、現代でも神話的世界観を守って、独特の文化や伝統を保持している人びとがいる。北米の最古の先住民族であるホピ族はとくに有名であろう。彼らは精霊信仰（一種のアニミズムとも言える）の中で生きていて、精霊から伝えられたとされる神話および預言を生活の中で最も大切なもの、よりどころとなるものとしているという<sup>1) 2)</sup>。多くの文明国が失った素朴な価値や文化、儀式、伝統などが温存されているというので、注目を集めてきている。こういった現代社会のなかにおける例外的な「未文明化」状況はノスタルジックな懐古趣味を満たしてくれるかもしれないが、世界史的な展望のもとで、人間社会の発展を跡づけようとする場合には、懐古的価値は余り意味がないだろう。

そしてその先に、新たな多様なコミュニティを単なる懐古や憧憬としてではなく、われわれの「意思」としてその位置価値を定める作業を示唆されていることを確認したい。

## 2 近代化

### 2-1 近代化という概念

近代とはいつか？ 近代（モダニティ）という時期については、概ね18世紀半ばないし後半に始まり、現代にまで接続する期間を意味するものと考えられている。ただ、この期間を前期、後期、あるいは、近代化（1）、近代化（2）の時期に分ける立場もある。前者の場合、20世紀末から後期近代とされ、後者の場合は時期は明示されることがないが概ね20世紀半ばが分岐点とされているようだ<sup>3)</sup>。

ギデンズは、近代をモダニティとして捉え、18世紀半ばから1980年代までの歴史的な時期全体を包括するものとしている。彼は続けて、ヨーロッパ封建時代に続く時期であり、脱封建社会の特徴的な面をすべて包括する時期でもあるとし、これをやや具体的に展開して次のように特徴付ける。産業化、資本主義、都市化および生活様式としてのアーバニズ

ム、世俗化、民主主義の確立と拡大、生産方法への自然科学の応用、生活のあらゆる面における平等に向けての幅広い運動が展開された時期である。そして、合理的思考と感情に左右されない「事実に即した」態度（つまり呪術からの解放）もその特徴であると。

だが、そうする一方で自らそれを「概念としては一般化されすぎで曖昧」と批判する。それでは近代社会の説明が「ポストホック post hoc）」であるというのだ<sup>4)</sup>。

また、ハーバーマスの場合は、近代（モデルネ）は、現代まで及ぶスパンを意味する。元々は芸術領域で使われていたタームで、19世紀後半から20世紀前半を指すものであったが、ハーバーマスはそれを現代にまで接続するものとして使用しているようだ<sup>5)</sup>。そしてそれはポスト・モダンの主張に対し、依然としてモデルネは進行中で、未完であるとされている。

近代化と産業化の関連を整理することも重要である。マルクス及びM.ヴェーバーは産業化と近代化を同一視していると言われているが、彼らが近代化の進行中にいたという歴史的制約のもとではやむを得ないことであった。その後の近代化の展開を知るわれわれは両者は概念的に異なると理解するようになってきている。その代表的論者が、ハーバーマスであり、ギデンズ、ベック、ウルリッヒらであろう。それぞれの「近代」の理解は異なるが、産業化は近代化に含まれるという点で同じと考えられる。

## 2-2 近代化の新たな領域

近代化と産業化は同じではないと理解することにより、近代化を経済システムないし産業領域にのみ限ることなく、歴史の広いパースペクティブにおいて考察することが可能になる。その違いが何を意味するのか、続けて明らかにしたい。

### 2-2-1 近代化の深化

近代化が及ぶ他の領域とは何か？ それは人びとが自らの生の最も深部の基盤である生活世界ないしコミュニティということになる。そのことを「生活世界」概念を簡略ながら整理することによって確認しておく。

生活世界とは、ごく平易な言い方をすれば、「日常的で自明な相互主観性の世界」であり、生活者が住む世界である。それは近代的な客観-主観の二項対立的世界理解を超えるものとして提出された認識方法上の革新として、フッサールによって提起された現象学的概念である。その後これは社会構築主義によって受け継がれ、社会分析にも適用されるようになったのだが、それでも依然として「意識哲学」の域を出ないものとされてきた。

社会構築主義は、生活世界を、自明の事柄、関係の集合である日常生活の、現実として自明視される（没問題的側面）総体のことであり、単なる存在以上に何ら補足的な検証を要しない領域でもあるとする。そこにおいては、人びとと他者との日常的な関係行為の中に形成される「パタン」が「客観的事実」として実感されることにより、制度（伝統、慣習、法律というルールや規範の体系）として認知されるに至ると捉えられる。（バーガー／ルックマン[2003]）のであった。見られるように、この「日常的な関係行為」は歴史的文脈を脱色されたレベルで捉えられており、このままでは社会科学的な分析に接続しない<sup>6)</sup>。

われわれは、歴史的現実としての共同体（コミュニティ）においてこのような日常的な関係行為の中から制度や秩序が現実として立ち現れ、人びとの行動の準拠枠として機能しあるいは制約することを確認しておこう。つまり生活世界を構造化する基盤として共同体

があった(ある)ということである。さらに付け加えるならば、生活世界を構造化する力は、歴史的な脈の中でその広がりや強度を変えてきている。そして重要なことは、それに対し人びとは、リアクティブを超えてプロアクティブな対応ができるかということである。それが世界内存在としてのわれわれには決定的に重要なポイントとなる。

#### 2-2-2 システム批判へ

生活世界的観点は、産業化のもたらす帰結を批判的に分析し、それを改善する思考や行為の基盤を提供する観点でもある。現代的問題に関連させてやや具体的に言うと、公害、自然破壊、市場至上主義などを批判、改修・矯正する視点や立場を準備・強化する基盤となるものである。その結果、産業化の帰結を批判的に受け止めつつ、その変質を志向するものとして、CSR、持続的可能性、持続的可能性の具体的な追求としてのSDGsなどが提唱されるに至ったのである。

いずれも社会的視点や市場経済の長期的視点を重視する。つまり、社会的視点を持ち、経済システムは上位の社会システムの部分システムであることを重視するものであるが、それらはいずれもコミュニティないし生活世界という領域から立ち上がる論理が起動するものであると言える。

経済システムの内部に限って言っても、現代の市場経済活動に必要な視点として、短期的利益の極大化から長期的極大化へ、資源の安定的長期的確保、サプライチェーンの安定性の維持などが提案されるのは、こうした部分システムであるという認識から生まれるものである。

これらの問題意識や論点がいかにして生活世界内に生成したかと言え、それも産業の近代化がもたらしたものの一部であるとするしかない。産業の近代化というプロセスがその内部から生み出した新展開であり、それも近代化という形質をもつ。産業化の帰結をさらに近代化するということになる。これが「再帰的近代化」ということである。産業化としての近代化とは違うもう一つの近代化があるのだ。近代化の近代化という「再帰的近代化」論である。

### 2-3 再帰的近代化

再帰的近代化論も論者によって若干ニュアンスは異なるが、「脱埋め込み」、「再埋め込み」という観点からのベックの説明は共通した理解を示すものである。まずベックの言うところから始めよう。

#### 2-3-1 ベック

ベックは次のように主張する

<かりに単純な(あるいは、従来正統視されてきた)近代化が、本質的に、まず工業社会という社会形態による伝統的社会形態の脱埋め込みと、次に工業社会による伝統的社会形態の再埋め込みを意味するとすれば、再帰的近代化とは、まず、もう一つ別のモダニティによる工業社会の脱埋め込みを、次に、もう一つ別のモダニティによる工業社会の再埋め込みを意味している。><sup>7)</sup>

そしてやや具体的に、そしてやや個性的に、ベックは近代化(1)(産業化)の進展により意図せざる結果としてさまざまな自己解体的現象や自己破壊的な影響が現実化すること指摘し、生活環境や社会に深刻な「リスク」が発生し、「リスク社会」が到来すること

が近代化（２）であり再帰的近代化であるとするのである。

### 2-3-2 ギデンズ

これに対しギデンズは知的な反省ないし批判に重点を置き、それが構造に働きかける点にウェイトを置く。例えば、彼によれば、再帰性（reflexivity）は<知識と社会生活の結びつきを説明する。私たちが社会に関して獲得する知識は、私たちが社会のなかで行為する仕方に影響を及ぼす可能性がある。たとえば、人は、ある政党の支持率が高いという調査結果を読んだ結果、同じようにその政党への支持を表明するかもしれない>（アンソニー・ギデンズ[2009]）

たとえば、近代化（１）は労働力の高い生産性を得るために創造性とか問題解決力を獲得できるように、教育を高度化する。その同じ過程が、近代化（１）のもたらす帰結に批判的な対応を呼び起こすことになることになる<sup>8)</sup>。

ギデンズは構造による行為の規制と共に、行為の実践が構造それ自体を変容させるとしており、構造の再帰性を想定していることになる。その際、行為者の主体性を重視し、その意味で機能主義理論を乗り越えていると評価される。単に意図せざる結果としての社会構造や社会関係のみに注目するのではないのである。ギデンズによれば言葉によって現実を変容させることであり、モダニティとして特徴づけられる思考方法や内容が、工業社会へ大きな影響を及ぼすということとされる。その代表が民主主義である。

ところで、民主主義が工業化社会の変質を導くと考える場合、それを可能にする原動力は何なのか？ 多様な価値や指向性の中からあるメッセージが現実の変容を可能にする根拠は何か？ しかし、ギデンズはそこをブラックボックスに入れたままで、とにかく第 1 の近代化は変質を余儀なくされ、衰退すると考えているようだ。ここにオートポイエーシスの影響を見ることが出来る。自己組織化現象は確かに興味深いものであるが、自然科学的方法を社会的現象の考察にそのまま適用することは、社会科学の責務を放棄することにつながる。根拠と論拠をきちんと提示した論理が必要である。

### 2-3-3 オートポイエティックな観点の陥穽

近代化の近代化が必然的であるにしても、再帰的近代化論者（特にギデンズ）は、オートポイエティック的にそれが生起するとしているだけで、その条件、ないしメカニズムの説明を放棄しているように見える。これはいわゆる自己組織性を社会現象に当てはめようとする論者に共通していることといってもよい。現実にはこの第二の近代化が必ずしも円滑に実現していないことを説明できないことの原因でもある。

つまり、この行為者の主体的働きかけに方向性と基盤を提供するものは何か？ というと、そこが必ずしも明らかではない。社会的行為者はたらきかける社会システム（構造）に関し、十分な知識を有してそれを進化させることが可能であると想定されているだけのようだ。これはやはり、オートポイエーシスの影響であると見ることができそうである。構造が構造要素を生みだし変化させるとともにその要素によって変容させられるという自然科学的自己組織性のロジックを採用しているかのようである<sup>9)</sup>。

われわれは、近代化を推し進めるドライビングフォースを重視する。それしてそれを資本主義的市場経済化の推進・展開と、それを生産力強化の面で強力に支援した科学・技術の発展に求める。特に科学技術の発展は、経済過程における能率・効率の重視と共に、その背後にある特有な合理性への不釣り合いな依存を生むことになった（後述）。そして、

アンバランスであったとは言え、合理化過程の進展ではあったことも十分確認しておくべきことである。

やや先取りして言うと、産業化としての近代化は、ヴェーバーの「目的合理性」を、ハーバーマスの用語では「認知的・道具的合理性」の展開をもたらした。これは理性の発展の結果でもある。こうした合理性の発展は、合理性一般の発展・進化を当然伴う。それが理性の進化でもあるからだ。続いて 理性と合理性(化) との関係を整理しておこう。

### 3 近代的合理化

二つの近代化があるとすれば、それをさえる合理化にも2つあることになる。

#### 3-1 合理化と合理性

合理化とは合理性の推進ないし追求、展開のことと言えよう。そして合理性は理性の発展と深い関わりがある。理性の発展が、認識の対象あるいは世界を分散化ないし分化させることにより、合理性の宿る領域を拡大し、その深化・高度化を合理化が推し進めてきたと言える。それが M. ヴェーバーのいう「普遍史的な呪術からの解放過程」であった。また、近代的意識構造を形成することにもなったのである。そのプロセスで、合理化は近代化(産業化)と重なり合い、相互推進的な関係を持つようになったと素描できる。

まず、「合理化」についての一般的理解を確認しておく。有斐閣『社会学小事典』によれば、合理化とは、「諸要素の間の連結様式が、ある特定の観点から見て矛盾することがないように、推理的理性 (ratio) に即して整序・首尾一貫化されること。前提とされる観点の相違に応じて様々な類型が考えられる。」このような合理化により、整序立てられた知の蓄積が可能となり、それが合理性の形態となる。このようにして、合理性は、合理化が「ある特定の観点」を基準として行われるということに関連し、論理的な首尾一貫性、科学的認識への適合性、目的・手段の関係の整合性、行為の計画性ないし能率性など、その類型が複数あることが示される。

このような解説ないし理解では合理化は単一ではないことは示されたとしても、その社会的含意が不明なままの平板的な類型化に終わっている。複数の合理化の存在を歴史的な文脈の中で立体的に見なければならぬ。

#### 3-2 類型を超えて：ハーバーマスの整理

こういった合理性が生まれる背景を M. ヴェーバーに依拠しながら、歴史的な文脈を導入することによって整理し、その重要な関連等を明らかにしたのがハーバーマスである。単なる合理性の類型化とは異なり、世界は主要な3つの合理性の複合体としてあることが示され、その包括的論証が重要であるとする。これは科学には、自然科学・社会科学・人文科学という3つの形態があるということにも対応する。

次に ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』(未来社)に依拠しながら行論に必要なかぎりにおいて、それらの3つの合理性の関連を整理しておこう

##### 3-2-1 世界理解の発展＝世界理解の分散化

ハーバーマスは、ヴェーバーに依拠しながら、理性の発展を「普遍史的な呪術からの解放過程」として捉え、さらにピアジェの理論的成果を導入しつつ、知性ないし理性の個体発生的進化が世界史的過程にも適用可能であるとし、世界理解が「客観的世界」、「社会的

世界」、「主観的世界」へと分散化するとする。これは近代的意識構造の基盤となり、近代にとって決定的に重要なこととされる。

### 3-2-2 妥当要求

世界理解の分散化に応じ、そこに妥当要求が生じる。妥当要求とは、やや聞き慣れない表現であるが、誤解を恐れずに言えば、基本的な命題の性格とでも言えようか。客観的世界に対しては「命題の真理」、社会的世界に対しては「規範的正当性」、主観的世界に対しては「誠実さまたは確証性」が妥当要求とされる<sup>10)</sup>。

### 3-2-3 基本的態度

妥当性要求に対してそれぞれ適切な基本的態度が形成される。客観的世界に対しては「客観化する態度」、社会的世界に対しては「規範順応的態度」、主観的世界に対しては「自己表示的態度」がそれである。

### 3-2-4 特有な関係性と合理化そして行為類型

それぞれの基本的態度は、他の世界に対しても向けられる結果、それぞれに特有な関係性が形成され、知の蓄積（合理化）が見られる領域が現れる（それに対応する行為類型が見いだされることがある）。以下、知の蓄積がある領域を記号(a)で、ない領域を(b)で表記する。

3-2-4-1 客観化する態度について言えば、その本来的な世界である「客観的世界」においては、「認知的＝道具的關係」(a)、社会的世界においては、「認知的＝戦略的關係」(a)、主観的世界においては「自己への客観主義的な關係」(b)を形成する。

3-2-4-2 規範順応的態度が客観的世界に向けられれば、「客観化されていない周囲に対する道徳的＝審美的な態度」(b)、社会的世界においては「義務的關係」(a)、主観的世界においては「自己への検閲的な關係」(a)が形成される

3-2-4-3 自己表示的態度が客観的世界に向けられた場合、そこには規範順応的態度の場合と同じく「客観化されていない周囲に対する道徳的＝審美的態度」(a)が、社会的世界に向けられると「自己演出」(b)が、本来の主観的世界に向けられると「自己への感覺的＝自発的な關係」(a)が、それぞれ形成される。

3-2-4-4 これらの関係領域において（すでに示しておいたように）、(a)には知の蓄積が可能となる。すなわち合理性が宿る。他方、(b)には知の蓄積はない。つまり合理性を生みだすことはない。また、行為は対象に適した形態を取らなければならないことから、特に「認知的＝道具的關係」領域では、「道具的行為」という類型がみられるのであり、「認知的＝戦略的關係」領域では「戦略的行為」類型が、そして「義務的關係」領域では「コミュニケーション的行為」類型が見られる。

### 3-2-5 合理化の競合

その結果、合理化の複合体が形成され、合理化の競合が発生することもある。そして、ハーバースの整理で特に注目し値するのが、社会的世界での合理化の競合である。そこでは「認知的・道具的合理性」と「道徳的・実践的合理性」が競合しているのである。同じく合理化の進展ということであれば、この競合はどちらが優先すべきとか優位とか言うことは言えない。そのバランスをどうとるかが、社会にコミットする個々の人間の主体性にかかわることと言える。

## 3-3 認知的・道具的合理性の肥大化

ところが、このように、複数の合理性の形態があるにもかかわらず、認知的・道具的合理性のみが合理性の形態であるという理解がもたれる傾向が強かった。それは近代西欧の経済的・政治的・文化的影響力の拡散と関連する。つまり、資本主義的商品経済は、科学技術の発展の成果を無償の生産力として利用することにより、経済的支配力の強化を実現し、政治的・文化的支配力を強めることになったのである（その時のイデオロギーとして採用されたのが民主主義）。それにより、認知的・道具的合理性の不釣り合いに大きい社会的影響が生まれ、それが「モダン」という発想方法をうみ、いわゆるモダニティを支えることになったのである。

こうしたモダンの発想においては、産業化を推進することになる科学観が社会観や、人間観にまで影響ないしバイアス（偏倚）をもたらすことになるのであった（ハーバーマスは、これをシステムによる生活世界の「植民地化」と呼ぶ）。

#### 4 コミュニティ

生活世界が植民地化から解放されるという事態を歴史的文脈の中に位置づけるとすれば、コミュニティの顕在化という観点が求められる。生活世界を構造化する主要で重要な要素がコミュニティの関係性だからである。われわれは進んでコミュニティ概念の整理とその地平の確認作業に取りかかろう。ただし、分厚い蓄積があるコミュニティ研究に分け入って新たな知見の創造・付加を目指すなどという大がかりな作業はどうていここではできない。これまでの主な業績の中から、行論に必要なかぎりでの論点を取り上げ、われわれとしてのスタンスを定めることを目的とする。

コミュニティの定義は 94 あると言われる<sup>11)</sup>ように、その特性や本質についてはさまざまな議論が存在している。理念的なレベルのものから、歴史の実体としてのものまで。その中には、既に触れたように、著しい拘束性や支配・被支配の関係性や、生まれや身分、階層などによる差別を強調するものや、反対に友愛や贈与原理を指摘するものまである。一般に歴史の実体としてのコミュニティないし共同体の場合は前者であり、規範としての共同体は後者といえる。

##### 4-1 実体的なもの

その一部を列挙してみると次のようなものがある。家族共同体、氏族（血縁関係）、領主制・荘園制、封建制とツンプト（中世都市の手工業者組合）、教区（パリッシュ）、熱帯植民地のプランテーションやドイツのグーツヴィルトシャフト・問屋制度、近代工業経営の労使関係、五人組・町内会（日本）、社区（中国）、バリ島のタバナン、バリ島の村落共同体、北米先住民のホピ族、近年ではボランティア・アソシエーションやNPOのいわゆるネットワーク型コミュニティ、町会、自治会（中間集団）など。ここにはまさに多様な共同性をみることができる。けっしてのどかな風景のみで構成されているわけではなさそうである。

##### 4-2 理論的なもの

共同性をどう捉えるかを巡る議論である。われわれは完全に孤立した存在ではなく、最初からある種の共同性の中にある。それを哲学領域では「世界内存在」と呼んだり、「投企された存在」等としてきた。また、社会学では「埋め込み」と呼んだりしてきている。その中で重要なものを幾つか取り上げてみる

#### 4-2-1 過去の土地所有や農業共同体を基盤とするもの

土地所を軸に共同体を規定するもの（大塚久雄）、あるいは農業共同体として、アジア的形態、古典古代的形態、ゲルマン的形態の類型を剔出するもの。

#### 4-2-2 人間の本来的共同性に基づき共同体を性格付けるもの

これは規範的共同体論と言うこともできる。山口先生の共同体イメージもこれに近いもののように思われる。松尾秀雄氏の共同体論はこの点を明瞭に全面に押し出しているのも、その典型として参考になる。氏は、共同体（コミュニティ）とは本来友愛的な人と人との繋がりを特徴としており、それを具体的に示すのが「贈与原理」であるとする。それは商品経済が交換を最も基本的な関係性として成り立っているのと同様に、共同体の基礎的關係性（あるいは本質）は贈与行為にあるとしている<sup>12)</sup>。

#### 4-2-3 マッキーヴァーのコミュニティとアソシエーション

既に古典的な定義となっているが、R・M・マッキーヴァー(1975)（中久郎・松本通晴監訳）『コミュニティ』（ミネルヴァ書房）によって改めて確認しておこう。マッキーヴァーはコミュニティが表現するものは「共同生活」であるとする。＜私は、コミュニティという語を、村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用いようと思う。＞（p.46）また、＜コミュニティは、社会生活の、つまり社会的存在の焦点である＞（p.47）さらに＜コミュニティとは、共同生活の相互行為を十分に保証するような共同関心が、その成員によって認められているところの社会的統一体である。＞（p.135）と。これに対しアソシエーションを次のように規定する。＜アソシエーションは、ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体である。＞そして、コミュニティとアソシエーションの関係を次のように述べる。＜アソシエーションは部分的であり、コミュニティは総合的である＞。＜・・・コミュニティはどの最大のアソシエーションよりも広く自由なものである。それは、アソシエーションがそこから出現し、アソシエーションがそこに整序されるとしても、アソシエーションでは完全に充足されないもっと重大な共同生活なのである＞（p.47）

#### 4-2-4 テンニエス

テンニエスのゲマインシャフトとゲゼルシャフトという分類は大きな影響をもった。先述の規範的共同体論もゲマインシャフトの考え方に影響を受けていると言えるだろう。

テンニエス（1957）（杉之原寿一訳）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粋社会学の基本概念—（上）』（岩波文庫）によってその主旨をピックアップすると、

＜この相互肯定的な関係そのものには、したがってまた結合体には、実在的有機体な生命体と考えられるものと、観念的機械的な形成物と考えられるものがある—前者が「ゲマインシャフト」の本質であり、後者が「ゲゼルシャフト」の概念である＞（p.34）

ゲマインシャフトの特性としては、＜すべての信頼にみちた親密な水入らずの共同生活＞（p.35）としている。また、それは共同体規制ないし強制を自ら生みだしたとするのである。すなわち、農村共同体には耕地強制法があり、＜村民は、その草地や畑や葡萄畑の経営耕作に際しゲマインシャフト的秩序に従わしめられている＞が、＜しかし、個々の農民に伝来の作順店頭的な播種収穫の時期を守らせるためには、明確な規定を定める必要はほとんどない。なぜなら、農民の個別経済は、それを捕捉するどころかまさにそれを生みだすところのゲマインシャフトの法なしには存続することのできないものであるから＞

である (p.82)。

ここに強制 (や規制、束縛) の起源を見て取ることができる。つまり、生産力水準に規定された必然性としてあったということだ。これは耕作強制だけに留まらないであろう。友愛に満ちた利他的な行為についても同様であると考えられる。それがなければ自らの存在も危うくなるからである。

#### 4-3 コミュニティの射程—近未来社会へむけて

様々な共同体(コミュニティ)のあり方や、それらの共通性の理解を見てきて、言えることは、人間存在の本質としての世界内存在、あるいは投企された存在、埋め込み、または共同性一般と、その環境的条件 (自然的、歴史的、宗教的等) を歴史的文脈の中で捉える必要性があるということである。固定化された共同体(コミュニティ)像は、規範的なものに導かれたものであるか否かに関わりなく、近代化の行く先を照らすことはないだろう。

### 5 新たな時代へのコミットメント基盤

様々な領域・レベルで各種のコミュニティが叢生している近代としての現代にあって、時代の展望を切りひらく基盤は共同体 (コミュニティ) である<sup>13)</sup>。それは近代化の近代化 (再帰的近代化) の基盤となるべきものであるが、それを現実のものとするためには、単なる「ゆらぎ」としての批判とか、異議申し立てをこえて、生活世界的なロジックの実践を主体的に進める必要があることが見えてきたのである。これこそ山口先生の問題提起が切り拓く新たな地平であろう。今われわれに求められているのはコミュニティ・アンガージュマン<sup>14)</sup>ではないか?

そして、アンガージュマンの向けられる対象はある種の秩序 (またはルール) と自律のバランスの実践である。コミュニティにおける秩序の源泉は、規範や道徳である。伝統的共同体 (コミュニティ) においては、これは受け継がれてきたものであった。それは環境的制約から必然的に形成されたものだった (したがって規範的拘束性が強いものが含まれることになる)。

これに対し、ハーバーマスの言う「コミュニケーション的合理性」の強化・浸透により、ディスクール (討議/妥当要求の正当性、たとえば価値や規範、を巡る論争。参加者が私人としての利害を超えた議論の形式を取る) がそれにとって代わることがいわゆる「再帰的近代化」を歩む途であるのではないか。

#### 【参考文献】

##### I 事典

- ・ 伊藤守他[2017]『コミュニティ事典』春風社
- ・ アンソニー・ギデンズ[2018] (友枝敏雄・友枝久美子訳)『社会学コンセプト事典』丸善出版
- ・ アンソニー・ギデンズ[2009]『社会学第五版』而立書房
- ・ 濱島、竹内、石川編[200]『社会学小事典』有斐閣
- ・ 見田宗介編集顧問/大澤他[2012]『現代社会学事典』弘文堂

## II その他

- ・ 天川彩[2018]『HOPIー「平和の民」から教えてもらったこと』徳間書店
- ・ ドラッカー[2007]（上田惇生訳）『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社
- ・ J・P・サルトル[1955]（伊吹武彦他訳）『実存主義とは何か』人文書院
- ・ テンニエス[1957]（杉之原寿一訳）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフトー純粹社会学の基本概念ー（上）』岩波文庫
- ・ ピーター・バーガー／トーマス・ルックマン[2003]（山口節郎訳）『現実の社会的構成』新曜社
- ・ ユルゲン・ハーバーマス[1985]（河上・フーブリヒト・平井訳）『コミュニケーション的行為の理論（上）』未來社
- ・ ユルゲン・ハーバーマス[1986]（藤沢・岩倉・徳本・平野・山口訳）『コミュニケーション的行為の理論（中）』未來社
- ・ ユルゲン・ハーバーマス[1987a]（丸山・丸山・厚東・森田・馬場・脇訳）『コミュニケーション的行為の理論（下）』未來社
- ・ ユルゲン・ハーバーマス／ニクラス・ルーマン[1987b]（佐藤・山口・藤沢訳）『ハーバーマス・ルーマン論争ー 批判理論と社会システム理論』木鐸社
- ・ ユルゲン・ハーバーマス[2000]（三島憲一編訳）『近代 未完のプロジェクト』岩波書店
- ・ 福田豊[2019]「生活世界の進化と ICT」日本流通学会誌『流通』第44号所収
- ・ ウルリッヒ・ベック／アンソニー・ギデンズ／スコット・ラッシュ[1997]（松尾精文／小幡正敏／叶堂隆三訳）『再帰的近代化ー近現代における政治、伝統、美的原理ー』而立書房
- ・ トーマス・E・マイルズ／ダン・エヴェベマ[2001]（林陽訳）『ホピ 神との契約』徳間書店
- ・ R・M・マッキーヴァー[1975]（中久郎・松本通晴監訳）『コミュニティ』ミネルヴァ書房
- ・ H・R・マトゥラーナ／F・J・ヴァレラ[1991]（河本英夫訳）『オートポイエーシスー生命システムとはなにか』国文社
- ・ 松尾秀雄[1999]『市場と共同体』ナカニシヤ出版
- ・ ハルトムート・ローザ[2022]（出口剛司監訳）『加速する社会ー近代における時間構造の変容』福村出版

---

1) 天川[2018]

2) トーマス・E・マイルズ／ダン・エヴェベマ[2001]

3) 前期、後期に分けるのがハルトムート・ローザ[2022]であり、近代化(1)、(2)とするのが後述の再帰的近代化論者である。

4) アンソニー・ギデンズ[2018]

5) ユルゲン・ハーバーマス[2000]

- 6)現象学、社会構築主義、ハーバーマスの生活世界概念の関連性の整理については、拙稿（福田豊[2019]）を参照のこと
- 7)ウルリッヒ・ベック／アンソニー・ギデンズ／スコット・ラッシュ[1997]、pp.11-12
- 8)この例に関しては、スコット・ラッシュは次のように言う <20 世紀後半において、かりに経済成長としての近代化を実現しようとするのであれば、労働力はかなりの情報処理能力を身につけ、したがって高度な教育を受けていく必要がある。こうした教育課程に必然的に含まれる問題探求や問題解決等の枠組みもまた、「システム」そのものに対する理性的批判になりうる知識を習得していくための条件である>ウルリッヒ・ベック／アンソニー・ギデンズ／スコット・ラッシュ[1997]、p.210
- 9)オートポイエーシスは、自己組織論の一種であり、H.R.マトゥラーナと F.J.ヴァレラによって唱えられ、社会科学領域にも多大な影響を及ぼしたと言われている。彼らによれば <・・・オートポイエーシスの概念に体现されている基本的な関係は、わかりにくくではあるが「円環的有機構成」「自己言及システム」といった表現によって十分言い表されている> H・R・マトゥラーナ／F・J・ヴァレラ[1991]
- 10)この概念を理解することは、合理性の類型整理のためのキーの一つと言える。その解説として分かりやすいものに次のようなものがある。ユルゲン・ハーバーマス／ニクラス・ルーマン（佐藤・山口・藤沢訳『ハーバーマス・ルーマン論争－批判理論と社会システム理論』（木鐸社、1987 年）の訳者註がそれである <ハーバーマスのいう「妥当要求」とは、発言がその妥当性（ある事柄・考えなどが普遍的な承認価値を持つこと）の条件を満たしている主張、従って、発言が（可能な）聞き手（一般）に対して通用するはずであるという要求である。コミュニケーション的意図で発言する際には、話し手はその発言に妥当要求を結びつけており、他方、聞き手はこの妥当要求に対して「はいかいいえ」の態度決定をする。話し手の発言が妥当要求の条件を満たしている、と聞き手が認めるときには、話し手と聞き手との間に合意（Konsensus）もしくは同意（Einverständnis）が成り立っている。>（p.178）
- 11)伊藤守他[2017]参照
- 12)松尾秀雄[1999]によれば、<われわれは、人間の行動の起源は、共同体の中での人間と人間のコミュニケーション様式の幾つかに集約されると考える。それは贈与行為と賭け行為ではないか。これらの二つの基本的ビヘイビアが交換と利潤追求ゲームの起源ではないかと思われるのである。>（p.275）そしてこの原理は現代の共同体（コミュニティ）にも受け継がれているとされる。<このように、贈与は人間と人間のコミュニケーションの効率的な手段として、どんな形態の共同体の中でも、積極的に、克頻繁に、行われてきた人間ヘイヴィアだったわけである。これも過去形で語ると、誤解になるわけで、贈与は人類の共同体への進化の中で連綿として息づいてきた人間のコミュニケーション手段でありつづけているのである>（pp.347-8）
- 13)ドラッカーは、伝統的コミュニティをネガティブなものとして捉え、近未来社会のコミュニティは、それらの頸木から解放された新たな繋がりが基盤となることを主張する。<いまや新しいコミュニティの存在が緊急に必要とされている。かつてのコミュニティは、もはや人を結びつける力をもたない。伝統的なコミュニティは、知識人が人に異動性を与

---

えたため機能しなくなった。しかも、われわれが知っているコミュニティは、強制や恐怖とはいわないまでも必要性によって結合されていた。共有するものによって結びつけられたものではなかった。＞（ドラッカー[2007]、p.219）また、＜かつてのコミュニティは宿命によるものだったが、これからのコミュニティは意志によるものとなる＞（同、p.226）  
14)＜アンガジュマンによって各人は人間の一つの型を実現しつつ自分を実現していく＞  
J・P・サルトル[1955]、p.68